

19世紀末プロイセンにおける実科系中等学校の再編

——不完全形態の中等学校と1890年学校会議——

寺 澤 幸 恭

The reform of the modern secondary school in prussia at the end of the nineteenth century

——The imperfect secondary schools and The School Conference of 1890——

Yukiyasu Terazawa

Summary

We are concerned with the reform of modern socondry school (Oberrealschulen, Realschulen and höhere Bürgerschulen) in Germany.

The main points are the following: In the background of the reform of socondry school was the anxiety about overproducing of students in the 1880s. The Prussian school conference of 1890 and the new regulations that resulted from it in 1892 granted the imperfect secondary schools privileges that Minister of Education had wanted as a means to reduce enrollments in the Gymnasien.

Received Apr. 28, 1995

Key words: Oberrealschulen, höhere Bürgerschulen, six-year Realschulen

はじめに

19世紀の80年代以降ドイツにおいては大学で教育を受けた者の就職難を理由としたいわゆる「供給過剰論」(Überfüllungsdiskussion)を背景として、9年制の中等学校(完全形態校[Vollanstalten]—以下「完全校」と略す)の再編が教育政策の中心となってくるが¹⁾、この完全校の生徒を肩代わりさせる目的で、7年制または6年制中等学校(9年制学校の上級段階を欠く不完全形態校[Proanstalten]—以下「不完全校」と略す)の再編が、中間層の教育機会の拡大と絡み合いながら、もうひとつの課題となっていた。

大卒者の数を絞り込むことを目的として、中等学校の再編をもくろむ国(プロイセン)の行政意思と、急増する都市中間層の初等教育以後の教育機会の拡充をめざす都市自治体行政の意思がこの不完全校の再編をめぐる対立をみせることになる。

1890年12月4日から17日までプロイセン文部省において開催された学校会議（いわゆる十二月会議²⁾）ではとくにリアルギムナジウム (Realgymnasium) の廃止など完全校の再編がその中心のテーマとなったが、実は不完全校の再編がもうひとつの焦点となっており、この問題は完全校の再編を裏側から支えるものであった。

1880年代の「供給過剰」論は中等学校における教職の就職難など社会的需要に対する大学生の過剰生産を根拠としていたが³⁾、この問題を考える上で確認しておきたい事実のひとつに、完全校の卒業生（成熟証明取得者）とそのなかで大学進学を希望した者の数の推移がある。卒業生の数は1881年の6千人台から翌82年に一挙に4千人台に落ち込み、その後1895年になるまで5千人に達しなかった。大学進学希望者も80年代にほぼ一貫してかなりの減少をみているのである。実は大学進学希望者が急増したのは60年代および70年代であった。1860年に1,466名であった大学進学希望者は1870年には2,473名に増加し、翌年1,475名に急減したのち、再び増加傾向に転じ1881年には4,985名となっている。その翌年の1882年に再び3,164名に急減して80年代の減少期に入るのである⁴⁾。70年代での大学生数が2倍に膨張するという事態は、「きわめて異例な現象として、人々の目に写った⁵⁾」のも事実であろうが、1890年段階で中等学校生徒の進学希望者数をみるかぎりそれはすでに過去のことに属していたのである。ただし、進学希望者の内容は70年代あたりから大きく様変わりしている。つまり1872年までの進学希望者はギムナジウム生徒に独占されていたのに対し、1873年から第一種実科学校（のちのリアルギムナジウム）の卒業生が加わってくるのである。大学進学希望者に占めるリアルギムナジウム生徒の比率は73年の4.2%から79年の11.8%へと上昇する。そしてこの79年から新たにラテン語を教授しない9年制の実科学校（のちのオーバーリアルシューレ）の卒業生が加わるのである。その後リアルギムナジウムの大学進学希望者はこの比率を下げていき、オーバーリアルシューレの比率は微々たるものであったが⁶⁾、80年代の「供給過剰」論の真のねらいはこれら実科系中等学校とりわけリアルギムナジウムの大学進学抑制にあったのである。

したがって1890年段階での「学生過剰の改善・社会的上昇の制御」のための中等教育制度での主要な方策としては次の二点があげられることになった⁷⁾。すなわち(1)リアルギムナジウムの廃止を含む完全校の再編と(2)完全校の生徒数制限のための6年制学校の振興である。(1)については先行研究によりかなり明確にされており⁸⁾、必要最低限の言及にとどめ、ここでは(2)の6年制学校の振興に対象を限定してみていくことにする。

I. ラテン語を欠く中等学校

(1) 1882年教則における高等市民学校とリアルシューレ

プロイセンの全中等学校を初めて統一的に規定した1882年3月31日付の「中等学校教則⁹⁾」によって類別された「中等学校」（大学との接続関係をもたないが行政当局から中等学校と認知されていた学校を含む）の1890年前後までの数量的状況を表一1に示す。これをみると、9年制学校であるギムナジウム、リアルギムナジウム、オーバーリアルシューレは校数、生徒数ともにほぼ横這い状態にあった

といえる。不完全校ではプロギムナジウムが校数・生徒数をともに増やし、リアルプロギムナジウム (Realprogymnasium) は80年代後半に拡張傾向をみせるが、1890前後から減少し始める。これらに対して7年制のリアルシューレと、6年制の高等市民学校 (Höhere Bürgerschule) は、校数、生徒数ともかなりの伸びを示している。なかでも高等市民学校の健闘が顕著である。

高等市民学校は1867年にプロイセンに編入された諸邦 (ハノーヴァーなど) で発達していた学校形態であり、同年の省令 (Ministrialreskript) によってWiesbadenのある市民学校がラテン語教授を欠く最初の高等市民学校としてプロイセンで認可された¹⁰⁾。1868年から1880年までの間にさらに13校の高等市民学校が設置されたが、その大部分はそれまであった中間学校 (Mittelschule) を拡充したものであった。1874/75年度になってようやく旧プロイセン地域でも認可され、Breslauに3校が設置された。これらの学校は1868年の軍補充訓令以来、卒業試験合格により一年志願兵資格が与えられていたが、この学校形態は当初実験校としてのみ認められていたにすぎなかった。これらの学校はその生徒を実業訓練や職業養成または職業専門学校に向けて教育するものとされており、完全校との接続関係をもたなかった。1878年の通達により6級制6年課程の学校と規定され、教科課程の最低基準が設けられた¹¹⁾。

1882年教則によるリアルシューレはオーバーリアルシューレの教科課程から第I級 (2年課程) を除いた7年制学校であり、その「教育目的はオーバーリアルシューレの第I級への成熟¹²⁾」とされた。すなわちリアルシューレはオーバーリアルシューレに接続する不完全形態とされていた。これに対し高等市民学校の標準教科課程はオーバーリアルシューレにきわめて近似するものの、「完結した教科課程をもち市民的職種に対する準備教育を施す学校¹³⁾」であり、市民的な完成教育を目的とする教育機関と性格づけられていたのである。そして文部省は高等市民学校を設置する自治体に対して「この標準教科課程からのかなり広範囲の逸脱¹⁴⁾」を認めている。

この点で注目すべきはベルリンの動向であった。ベルリン市は1884年から精力的に高等市民学校の設置に務め十二月会議が開かれる1890年までに8校を新設していたが¹⁵⁾、そのさいベルリン市は初等教育機関であるゲマインデ・シューレ (Gemeindeschule) から高等市民学校への進学を可能なかぎり容易にするよう努力していた。そのため、最下級すなわち第VI級 (第1学年) から外国語 (フランス語) を教授することになっていた標準教科課程とは異なり、ベルリンの高等市民学校は第IV級 (第3学年) からに繰延べ、ゲマインデ・シューレとの接続関係をつくりだしたのである。これによって国の教育行政では画然と分離されていた下級学校制度 (民衆のための初等教育機関) と中等学校制度 (不完全形態ではあるが) とをつなぐ役割を高等市民学校が果たせるようになったのである。当時市の視学官としてこの高等市民学校の普及に尽力していたのがベルトラム (Bertram) であり、1884年に設けられた最初の高等市民学校はのちに彼の名を冠してBertram-Realschule (Nr. 1) とよばれることになる。

表一：プロイセン中等学校の校数と生徒数

校種	ギムナジウム		プロギムナジウム		第一種実科学校		高等市民学校(全)		実科学校 (ラテン欠9年制)		地方工業学校/ 第二種実科学校				生徒総数
	年	校数	生徒数	校数	生徒数	校数	生徒数	校数	生徒数	校数	生徒数	校数	生徒数	校数	
1882	251	74,805	35	3,820	86	25,865	102	13,279	12	3,878	19	4,864			126,511
					リアルギムナジウム		リアルプロギムナジウム		オーバーリアルシューレ		リアルシューレ		高等市民学校		
1883	253	76,358	36	3,946	90	25,891	85	8,705	12	3,935	17	4,161	20	4,533	127,529
1884	253	77,043	36	4,079	90	25,406	88	8,750	12	3,956	17	4,119	18	4,714	128,067
1885	257	77,979	37	3,844	89	24,178	88	8,674	14	4,901	18	4,012	19	5,173	128,761
1886	259	77,718	39	4,270	89	24,078	86	8,684	13	4,638	17	4,416	22	5,851	129,655
1887	263	78,498	40	4,558	89	24,400	87	8,858	12	4,787	17	4,687	22	6,183	131,971
1888	264	78,683	39	4,182	88	24,805	89	9,250	11	4,663	19	5,541	25	6,898	134,022
1889	266	77,629	38	4,021	87	25,261	87	9,223	11	4,788	20	5,909	28	8,022	134,853
1890	267	76,537	41	4,442	88	25,582	84	8,883	10	4,587	21	6,522	29	8,784	135,337
1891	270	75,599	45	4,922	86	25,265	85	8,620	9	4,080	20	6,737	36	10,744	135,967
1892	271	74,907	44	4,512	89	25,017	85	8,486	9	3,970	20	6,883	36	12,259	136,034
													リアルシューレ		
1893	272	74,951	44	4,155	88	24,781	84	8,169	12	5,516			55	19,231	136,803
1894	274	75,266	44	4,027	87	24,499	79	7,449	20	8,664			64	18,334	138,239
1895	274	75,233	44	4,372	86	24,608	74	6,750	24	10,156			67	18,924	140,043
1900	291	85,939	50	5,705	77	20,682	23	1,932	35	13,688			32	28,684	156,630
1901	295	87,474	59	6,847	76	21,078	21	1,884	37	14,799			39	29,975	162,057

出典：Müller, D.K./B.Zymek (Hg.) : Datenhandbuch zur deutschen Bildungsgeschichte, Bd.2., Höhere und mittlere Schulen, 1. Teil, 1987, S. 53. u.S. 55.より作成

(2) オーバーリアルシューレ

オーバーリアルシューレはそれまで第二種実科学校とされた学校のうち9年課程をもっていた工業学校を主たる前身としていた。1882年教則ではラテン語を欠く実科系学校は高く評価され、限られた資格しか与えられなかったもののギムナジウムやリアルギムナジウムと並ぶ9年制の中等学校として「少なくとも理論上は同等¹⁶⁾」と位置づけられただけでなく、その独自性が強められた。すなわちギムナジウムでは古典語の時間が削られて自然科学が増やされ、リアルギムナジウムでは逆に自然科学が削減されラテン語が強化されてこの両学校の間には一定の接近が図られたのに対し、オーバーリアルシューレでは近代外国語と自然科学の比率が高められたのである¹⁷⁾。1882年教則はオーバーリアルシューレをギムナジウムと肩を並べる中等学校にすべく努力していたこの学校タイプの校長や教員たちを大いに励ますものであった。彼らは「ラテン語を欠く中等学校制度振興連盟」(Der Verein zur Beför-

derung des lateinlosen höheren Schulwesen) を組織して運動を進めていたが、その指導者がハーゲンの工業学校校長ホルツミュラー (Gustav Holzmüller) であった¹⁸⁾。1890年学校会議に招かれたオーバーリアルシュレーの代表はきわめて限られた人数でしかなかったが、そのひとりであるフィードラー (Fiedler: プレスラウ・オーバーリアルシュレーの校長) は彼らの構想を明確に表明した。彼は9年制学校の種別に関する「議題1」のための報告のなかで、「三分岐は原理的にのぞましくない」として「主として古典語を教授し、総合大学の準備教育を行うギムナジウム」と「近代語を基礎に数学・自然科学、製図を強化して市民的職業や工科大学への進学、技術系公務員のための準備教育を提供するオーバーリアルシュレー」からなる二分岐を将来のあるべき9年制学校制度の姿であると主張している¹⁹⁾。学校会議に臨んだ彼らの戦略はラテン語を教授しているリアルギムナジウムの廃止を求めている国王やギムナジウム勢力と手を結びながら、オーバーリアルシュレーに技術系エリートの準備教育機関としての確固たる地位を与えることにあった²⁰⁾。

II. 1890年全議での高等市民学校をめぐる議論

(1) 「議題14」：高等市民学校の振興

1890年学校会議の主要な結論のひとつは、将来においては二種の9年制中等学校、すなわち古典語(ギリシア語とラテン語)を教授するギムナジウム、古典語を教授しないオーバーリアルシュレー(9年制)と高等市民学校(6年制)のみで中等学校制度を構成する、というものであった。

会議の主催者が用意した14の議題のうち高等市民学校を直接の対象としていたのは「議題14 (Frage 14)」であり、12月16日に審議されている。「議題14」は以下のとおりであった。

「将来、高等市民学校の教科課程を現在よりも早く終了させることにより、他の中等学校におけるよりも早く一年志願兵資格を取得できるようになり、またその他の資格においても高等市民学校に有利になるように変更が加えられるとすれば、高等市民学校に対する需要は増加するであろうか。そのためにはいかなる方策が行われるべきか。(高等市民学校を既存の学校と結合する。既存の学校の一部を転換する。国立または国によって援助される新しい高等市民学校の制度)²¹⁾」

ここにみられるのは高等市民学校の振興であり、そのためこの学校で一年志願兵資格²²⁾を他の中等学校よりも一年早く取得できるようにすれば、この振興は可能かどうかを確かめたい。そしてそうであるならば、末尾の括弧書きの部分に示されている方策が的確であるか、ということである。この他の中等学校には不完全校も含まれているが、むしろ完全校であるギムナジウムとリアルギムナジウムを指していることはほかの議題から推測できる。つまり「供給過剰」論と関連して完全校に殺到してくる生徒たちの一部を不完全校に振り向けようとする意思がみられる。不完全校に振り向けることができる生徒は本来完全校を中途退学する生徒が想定され、これらの生徒は「供給過剰」論とは無関係の存在であるはずだが、完全校の第II下級(第6学年)まで在学し一年志願兵資格証明を取得した生徒の一部にはこの資格を取得したことによって、退学を見合わせさらに上級に進みアビトゥーアの取得をめざす者がおり、これらの者こそギムナジウムによる大学進学資格独占によって保障されていた

いわゆる「教養市民層」の地位をおびやかす恐れがあった。「教養市民層」の側は、下級および中間段階で退学する生徒をギムナジウム教育にとっての「負担」あるいは「重荷」(der Ballast)とよんでその排除を声高に要求したのだが、実は彼らが最も警戒していたのは本来中途退学するはずのこれらの生徒から上に述べたような上昇志向が生まれることであった。

(2) 高等市民学校の目的と名称

他の議題と同様、この「議題14」については会議開催の前に報告者が指名され、会議では報告者があらかじめ郵送していた「報告」に基づいて審議が進められた。「議題14」についての報告者は、前述のホルツミュラーとベルトラムそしてデュッセルドルフのリアルギムナジウム校長マッティアス(Mattias 彼はのちに文部省参事官になる)の三名であった。報告をみると三名とも高等市民学校の振興には賛成していたが、高等市民学校の性格と位置づけについてベルトラムは他の二人と明らかに対立していた。

まず、ホルツミュラーは議題のめざしている目的に次のように解釈し理解を示している。「われわれはラテン語のない学校、特に6年制の高等市民学校を普及させることによって有力な中間身分を創出しようとしている。われわれは、あまりに多く大学に進み下級官吏に向かう中間身分を再び実際の労働に向わせなければならない。これは高等市民学校の上につくられた中級専門学校によって実現される。中間身分を上流階級(die oberen Zehntausend)と労働大衆の間の亀裂を埋める堅固な保守的な要素にするために中間身分を堅固なものにしなければならない。したがって国家はこのようなラテン語のない学校の発展を促進させるためにすべての関心をそこに向けているのだ²³⁾」。

そして彼は「高等市民学校についてはリアルシューレという名称がふさわしいと考える。このリアルシューレという名称は同時にオーバーリアルシューレとの関係を示すものである²⁴⁾」と述べて、高等市民学校に「中間身分」を「実際の労働」に向かわせる任務を負わせ、同時にこの学校を中級専門学校(mittlere Fachschulen²⁵⁾)あるいはオーバーリアルシューレとの接続関係をもつ教育機関にすることを主張している。

マッティアスはさらに明確に高等市民学校を6年制中等学校にすることを求めている。彼はこの学校の名称、教員の称号および給与といった「外的条件」を「9年制の姉妹校」すなわちオーバーリアルシューレと「同等」にして、高等市民学校の社会的評価を引き上げることが「方策の前提条件²⁶⁾」であると述べ、高等市民学校をリアルシューレに改称することを次のような理由を挙げて勧告する。すなわち高等市民学校という名称は「不明確で誤解を招きやすく」、「いわゆる高められた初等学校とかファルク大臣時代からの中間学校などの別の学校形態と混同されがち」である。「これらの学校はこれまで親たちの偏見を除去できないでいる。なぜなら親たちは学校の名称にこだわっており、息子をリアルシューレ(不完全な中等学校—筆者注)に相当する学校に行かせたいと希望しているからである」。たとえ「親たちにその学校はかつてのリアルシューレであり、いまこれを我々は高等市民学校と呼ぶだけであると言っても、親たちはそれに耳を貸さないであろう」。したがって「この学校にリアルシューレという名称を与えることを希望する。これで骨格がしっかりとしてくるのだ!すなわちリア

ルシューレとオーバーリアルシューレ、下級ギムナジウムと上級ギムナジウムである²⁷⁾。ここにはオーバーリアルシューレの不完全校であった旧リアルシューレが初等教育に上構された市民的な教育機関とは一線を画する確固とした中等学校制度の一環であり、リアルシューレと名づけることによってこのような位置づけを高等市民学校に与えようとする意図が明らかである。これはオーバーリアルシューレの威信を高めようとするホルツミュラーたち「ラテン語を欠く中等学校制度振興連盟」に結集した人々の利害とも一致するものであった。オーバーリアルシューレの擁護者たちにとってはその不完全校を初等教育から切り離された中等学校にしておく必要があったからである。

これに対してベルトラムは、「この会議が一致して高等市民学校に向けている好意は、この学校の振興に努めている者にとってひとつの励みになる」とした上で、「高等市民学校の目的をしっかりと心に止めてくださること、そしてこの学校が重荷を引き受ける学校だというような偏見を退けていただきたい」と「議題14」にみられる完全校の生徒数制限のために高等市民学校が利用されることを警戒している。「そもそも重荷などというものは存在しないのであります。この学校は法制化された予備校と考えられるべきものではなく、まったく厳格な活動を行っているのです」。したがって「高等市民学校は将来のオーバーリアルシューレの核のようなものと考えられてはなりません。この学校はむしろ中間的な実業身分の教育を目的とし、正確な科学、製図における幅広い知識を与え、実業従事者にその仕事を促進し、外国へ目を向けさせようとしているのです」。「第二にこの学校は技芸と詩における国民の精神運動の一部を引き受け、実業従事者がたんにその仕事や稼ぎにおいて満足するためだけでなく精神的にも満ち足りた生活を送れるようにも意を注ぐこともできるのです。そこでまず、非常に良い仕事を受け継ぎあるいは創造している優秀なツunftのマイスターがその息子に仕事を継がせるのではなく、[大学での] 勉学をさせようとする現今の風潮を是正しなくてはなりません²⁸⁾」。

このように高等市民学校の目的をとらえるベルトラムは、この学校にリアルシューレという名称を与えることを拒否する。「私は『高等市民学校』という名称を認めていただくことを希望する」。「『リアルシューレ』では上部を切られたリアルギムナジウム、または上部を切られたオーバーリアルシューレということになってしまう。もしわれわれがこの高等市民学校をリアルシューレと呼ぶことになれば、この学校の意義が理解できなくなる。高等市民学校ならばすべての人が理解しており、その名称はこの学校の目的と完全に対応している。高等市民学校をリアルシューレと呼ぶことの根拠はオーバーリアルシューレを援護するために持ち出されたものであるが、私の目には逆効果だとみえる」。ベルトラムにとって「高等市民学校は高等市民学校であり、中等学校の全体のなかできわめて高い価値をもつ構成要素なのである²⁹⁾」。このような高等市民学校で「教育を受けた青年たちのなかから、のちにもっと上の教育機関に進むに十分な知的能力を備えた多くの者が見いだされることになるようにも考えられ」、「このような者たちにその後の三年間のギムナジウムの教育を通して総合大学への、または実科的な教育を通して他の中等学校への準備教育を与えることが可能となる」が、しかしこれはあくまでも「将来の問題に属する³⁰⁾」ということになる。

ここでベルトラムが強調している高等市民学校の意義はこの学校が市民の完成教育を目的としていること、そのために弾力的な教科課程の構成をとっていることであろう。この点でその不完全校を初

等教育から切り離された中等学校にしておく必要があったオーバーリアルシューレの擁護者たちと見解を異にすることになったのである。

(3) 議題14についての決議

1890年12月16日、学校会議は「議題14」について次のように決議した。「高等市民学校に今以上に大幅な諸資格が与えられることにより、また一年志願兵資格がその他の中等学校においても試験によってのみ取得できるとされることによって、この学校に対する需要が増大するならば、そのために次の諸施策が望まれる」として、①ギムナジウムやリアルギムナジウムの上級にほとんど生徒を送り込んでいない7年制学校を高等市民学校に転換する。②生徒の圧倒的部分が第II上級以上に進級していない9年制のギムナジウム及びリアルギムナジウムも高等市民学校に転換する。③ギムナジウムやリアルギムナジウムが複数存在している都市ではその1校を高等市民学校に転換し、新設する場合は高等市民学校の設置を考慮する。④中等教育機関が存在していない都市では、高等市民学校の設置を優先する。⑤国はギムナジウムに対して行ってきた同じ原則にもとづいて高等市民学校の設置及び維持を支援すべきである。⑥高等市民学校の学術的教員の給与の平均は9年制学校と同等にする。そして最後に「高等市民学校についてはリアルシューレという名称がふさわしいと考えられ」、この名称は「オーバーリアルシューレとの関係を示している³¹⁾」とこの決議を括っている。

決議はホルツミュラーやマッティアスの報告を下敷きとするものであった。要約すれば高等市民学校の普及をはかるため、既設の学校の転換と新設を促進し、高等市民学校の設置及び維持についての国の援助と教員の待遇をギムナジウム並みに高めるというものである。そのさい転換が求められたのはラテン語を教授している中等学校であった。ここにこの学校が下級学校（初等学校や中間学校）から切り離された中等学校であるとする意思が明確にされている。そして学校会議は資格制度を審議した「議題13」の決議でオーバーリアルシューレには工科大学入学資格、総合大学での数学と自然科学の修学資格、鉱山、建築、機械製造、造船、郵便、営林各部門での中級官吏職への就職資格などを、また高等市民学校（新リアルシューレ）を含めた新しい6年制学校の卒業生にはすべての下級官吏に就く資格などを与えることを勧告し、これらは1892年の教則によって実現するのである³²⁾。また「9年制学校で卒業以前に離学する生徒を顧慮して6年制課程を基準とする修了を認める」（「議題6」）、「一年志願兵資格を（9年制学校の）第II下級修了後での試験合格と結合されるならば、この種の試験は（第II下級に）対応する6年制学校においても行われることが望ましい」（「議題10」）との決議を受けて導入された「修了試験」（Abschlussprüfung）も一年志願兵資格を希望する生徒をギムナジウムから新リアルシューレに振り向けるという意図をもつものであった³³⁾。

III. 新しいリアルシューレ

(1) 1892年教則とリアルシューレの発展

1892年1月6日の「中等学校教則」（Lehrpläne und Lehraufgaben der höheren Schulen）は従来

の不完全校の第II上級を取り消し、これらの学校を6年課程とした。そしてリアルシューレは高等市民学校と合わせられて新しいリアルシューレとなり、「オーバーリアルシューレの上級段階への進学準備と、就職のための修了³⁴⁾」という二つの目的を担うことになったのである。この二つの目的のために、教科課程におけるリアルシューレとオーバーリアルシューレとの関係は他の完全校と不完全校との関係とは異なることになった。すなわち一方では「ギムナジウムやリアルギムナジウムと同じく、オーバーリアルシューレの教科課程も第II下級の教育目的の達成を基準として一定の完成をみるように配慮されたため」、リアルシューレはオーバーリアルシューレの不完全校とされたが、しかし同時に教則の規定には「教育目的の決められた修了とは関係なく³⁵⁾」という留保条件が付けられ、特に二つの近代外国語についてリアルシューレの教科課程の構成はオーバーリアルシューレの教科課程からずれることを認めている。すなわち1882年教則の高等市民学校と同様にこの新しいリアルシューレにも「地域の事情の程度に応じて一般的な規制から外れることが可能」となっているのである。

これは次のように説明されている。つまり「ギムナジウムやリアルギムナジウムの不完全校は完全校に拡充される傾向を示しているが、リアルシューレは完成教育を与えるのであって、完全校のための過渡的な形態ではない」のである。もちろん新リアルシューレは1892年教則によってオーバーリアルシューレとの接続関係が明示されたのであるが、それはたんに「リアルシューレで取得した成熟証明はオーバーリアルシューレの第II上級への進学資格となるということ。このような意味にすぎないのである³⁶⁾」。

1890年当時のプロイセンでは、高等市民学校が29校、リアルシューレが21校開設されていたが、10年後の1901年には139校のリアルシューレが設置されていた（1890年以後新設されたものは41校）。生徒数も約3万名となり、中等学校生徒数の18%を占めるまでに成長している³⁷⁾。しかしオーバーリアルシューレとの接続関係についていえば、このようなリアルシューレの成長のためにオーバーリアルシューレの上級段階に進むことのできた卒業生の比率は低いものであったといわれている³⁸⁾。

(2) ベルリンのリアルシューレ

1901年の段階で新しいリアルシューレが最も普及していたのは首都ベルリンにおいてであった。前に述べたようにベルリンではベルトラムらの努力で1884年に開設されて以来、高等市民学校の設置が精力的に進められ、十二月会議が開かれる1890年までの8校に加えて1901年にはさらに4校が増設されていた。これら12校はその後すべて新しいリアルシューレとして認可を受けている。このうち最初に設置された学校、すなわち「ベルトラム・リアルシューレ (Nr. 1)」が1910年に発行した年報 (Jahrbuch) から新しいリアルシューレの実態をみていくこととする。

1884年開設から1909年春期までにこの学校に在学した生徒総数は3,067名であり、父親の職業をみると、大部分は手工業・工業と商業（全体の82.1%）であった。これらの生徒の入学以前の教育歴をみると、ゲマインデ・シューレ出身者が1,836名と最も多く全体の59.6%を占めていた。他の中等学校出身者がこれに続き929名（30.5%）で私立学校出身者は302名（9.8%）となっている。このなかで最下級である第VIクラスから入学してきた生徒は全体で522名（全体の17.6%）しかなく、多くの生徒は最

下級より上のクラスに入学している。

次に卒業生と一年志願兵資格証明取得者の数をみると、成熟証明をもって卒業していった者は1909年春までに980名つまり全生徒の39%がこの学校の目標に達したことになる。そしてこの25年間に一年志願兵資格証明を取得した者は1,003名となっている。

1909年春までに成熟証明をもって卒業した者（アビトゥリエント）980名の卒業後の進路をみてみると、ほぼ4割にあたる398名が商業・銀行関係に就職し、以下公務員171名、工芸関係40名、工業関係25名、教員23名、機械製造工と電気技術工各19名、機械工15名、そして軍務に就いた者が24名となっている。これら就職組に較べて進学組は少なく157名で、そのうちオーバーリアルシューレに進学した者は81名、建築学校や技術学校には76名となっている。

なお、中途退学者（成熟証明をもたずに離学した者）については1898年秋から1909年春までのほぼ10年間についてだけ記載があり、その総数は610名である。そのうち他の教育機関に移った者が211名おり、166名が中等学校へ、45名が民衆学校へ転学している。就職した者は399名で、そのうち商業関係が227名、手工業などが172名となっている³⁹⁾。

卒業生の就いた職種はいわゆる職員（Angestellte）が主流を占めていること、また卒業生や一年志願兵資格取得者に較べてオーバーリアルシューレ進学者の比率がきわめて小さいことが注目される。この学校はリアルシューレとなったのちも基本的には高等市民学校の性格を保ち続けたといえよう。しかしながら少数とはいえオーバーリアルシューレや建築学校・技師学校といった中級専門学校と思われる教育機関への進学者が存在したことは1890年学校会議のめざしたものがこの部分では成果をあげていたといえる。

結 び

1880年代に声高に叫ばれた「供給過剰論」は中等学校の大学進学希望者の動向をみる限り、その内実には疑わしいものがあつた。しかしこの「供給過剰論」を梃子にして90年代の中等学校改革が進められ、1890年の学校会議はラテン語を欠くオーバーリアルシューレ・高等市民学校（新リアルシューレ）という第三の学校系列の確立をめざしたのである。会議がリアルギムナジウムの解体とともにラテン語を教授しない実科系学校に高い評価を与えたのはラテン語など古典的教育を志向しない中間身分層を新リアルシューレからオーバーリアルシューレそして技術系専門職という、ギムナジウム・総合大学とは別の選抜系列のなかに取り込むことをねらったものであつた。そしてオーバーリアルシューレ卒業生に中級官吏経路への、新リアルシューレ卒業生に下級官吏経路への資格を与えることによってその達成を意図したのである。新しいリアルシューレは市民層の限られた部分を9年制中等学校であるオーバーリアルシューレに送り込むという役割をあてがわれたといえる。

時代の要請に応じながら中等教育の「選良性」を保持すること、これが中等学校制度改革に対する行政当局の基本方針であり、92年教則によって生まれた新しいリアルシューレはこの基本方針に沿って三種類の中等学校系統のひとつに位置づけられたのである。

1890年学校会議においてオーバーリアルシューレはギムナジウムとの同格化へ向けて地歩を固める

上で着実に成果をあげたといえよう。工科大学入学資格、総合大学での数学と自然科学の修学資格、鉱山、建築、機械製造、造船、郵便、営林各部門での中級官吏職への就職資格などを確保したことがギムナジウムなどとの同格化にとって重要な意味をもったことはいうまでもないが、次のことにも注目してよいように思われる。すなわち82年教則による旧リアルシューレと比較してめざましい発達をみせていた高等市民学校を旧リアルシューレと統合してオーバーリアルシューレの不完全校としたことによって、オーバーリアルシューレはギムナジウムやリアルギムナジウムの不完全校に匹敵する数の不完全校のネットワークを手に入れることができたということである。つまり旧リアルシューレとは異なり6年制で資格の面でも優遇された不完全校との接続関係を獲得したのである。しかもベルリンのリアルシューレの例にみられるようにラテン語を教授しないこの教育機関にはより広範な市民層から生徒をリクルートすることが期待できたのである。このような不完全校のネットワークを背後にもつことによってオーバーリアルシューレは中等学校制度の一翼を担う新しい支柱としての存在を誇示できるようになったのである。この点で十年後の1900年学校会議および1901年の「プロイセン中等学校教則」による同格化への気運はすでに熟していたのである。

注

- 1) Führ, C., Die preußischen Schulkonferenzen von 1890 und 1900, In: Baumgart, P. (Hg.), Bildungspolitik in Preußen zur Zeit des Kaiserreichs, 1980. S. 193.
- 2) 1890年学校会議はその議題と参加者についての方針が1890年4月の枢密院で決定されたのち文部大臣ゴスラーによって準備された (Ibid., S. 198-199)。会議には44名の委員 (中等学校, 大学, 地方学務当局関係者のほか政党や実業界の代表など) と15名の政府委員 (文部省, 大蔵省, 商工省, 陸軍省など) が招集された。(Verhandlungen über Fragen des höheren Unterrichts, Berlin, 4. bis 17. Dezember 1890, Im Auftrage des Ministers der geistlichen, Unterrichts- und Medizinal-Angelegenheiten, 1891, S. 15-17)
- 3) Ibid., S. 194
- 4) Müller, D.K./B.Zymek (Hg.), Datenhandbuch zur deutschen Bildungsgeschichte, Bd. II. Höhere und mittlere Schulen, 1. Teil, Sozialgeschichte und Statistik des Schulsystems in den Staaten des Deutschen Reichs, 1800-1945, 1987, S. 276.
- 5) 潮木守一「19世紀末ドイツにおける教育過剰論争」『名古屋大学教育学部紀要 (教育学科)』第32巻 (1985年) p.105
- 6) Müller, D.K./B.Zymek, a.a.O., S.275-276.
- 7) プロイセン文部大臣ゴスラー (Goßler 在任期間1881-1891) の学校政策の目標は社会の下層及び中層の子弟の中等学校への在学を厳格に制限することにあった。そのために彼があげた方針はラテン語を教授する中等教育機関数の抑制とラテン語を教授しない不完全校の優遇であった。(Müller, D.K., Sozialstruktur und Schulsystem, Aspekte zum Strukturwandel des Schulwesens im 19. Jahrhundert, 1977. S. 287)
- 8) 完全校の再編についての主な先行研究としては前掲のFühr, C. (1890), Müller, D.K. (1977) のほかに次のものがある。(1)Heydorn, H.J./G.Koneffke, Zur Bildungsgeschichte des deutschen Imperialismus, Einleitungen zur Neuherausgabe der Preußischen Schulkonferenzen 1890/1900 und der Reichsschulkonferenz von 1920, 1973. (2) Glöckner, E., Zur Schulreform im preußischen Imperialismus, Preußische Schul- und Bildungspolitik im Spannungsfeld der Schulkonferenzen von 1890, 1900 und 1920, 1976. (3)Albisetti, J.C., Secondary school reform in imperial Germany, 1983.
- 9) 正式には『中等学校改訂教育課程導入に関する回章』[Circular-Verfügung betreffend die Einführung der revidierten Lehrpläne für die höheren Schulen]。
- 10) Wiese, L. (Hg.), Das höhere Schulwesen in Preußen, Historisch-statistische Darstellung, 2. Bd. 1869, S. 57-61.

- 11) Müller, D.K./B.Zymek, a.a.O., S. 48.
- 12) Wiese, L./B.Irmer (Hg.), Das höhere Schulwesen in Preußen, Historisch-statistische Darstellung, 4. Bd. 1902, S. 137.
- 13) Ibid., S. 5.
- 14) Ibid., S.138.
- 15) Ibid., S.218-220.
- 16) Ibid., S.20.
- 17) Exner-Seemann,K.,Das Realschulwesen in Preußen, Schulentwicklung und Sozialstruktur der Realschulabiturienten der Rheinprovinz in der 2. Hälfte des 19. Jahrhunderts. 1991, S. 56-57.
- 18) Glökner, E., a.a.O., S. 50. Hagenの工業学校は1901年にオーバーレアルシューレに転換した。
- 19) Verhandlungen 1890, a.a.O., S. 25.
- 20) 1880年代前半に順調に校数・生徒数ともに伸ばしていたオーバーレアルシューレが後半になると振るわなくなっている(表一参照)。これには1886年7月6日の規程(商工省)によってそれまでオーバーレアルシューレに与えられていた工科大学入学資格及び鉱山技師, 建築技師, 機械製造部門での国家公務員資格が取り上げられたことが大きく影響していると思われる。(Wiese, L./B.Irmer, a.a.O., S. 712)
- 21) Verhandlungen 1890, a.a.O., S. 60.
- 22) 帝国宰相により認可された「一年志願兵のための学問的能力に関する証明書を発行できる教育機関」は次のように等級化されていた(1875年の国防規程の第90章)。9年制学校は第II級での在学, 7年制学校は第I級での在学, 6年制学校は卒業試験合格。(Müller, D.K./B.Zymek, a.a.O., S. 23-24.)
- 23) Verhandlungen 1890, a.a.O., S. 692.
- 24) Ibid., S. 697.
- 25) ホルツミュラーはその報告の中で一年志願兵資格取得を入学資格とする次のような領域での中級の専門学校の設置を文部省が関係省庁に提案することを求めている。すなわち機械製造, 精錬, 建築, 化学・繊維, 商業・交通, 農業, 工芸, 商船など(Ibid., S.61)。なお専門学校と一年志願兵資格との関係については拙稿「専門学校制度の構造と一年志願兵資格——ドイツ・プロイセン工業系専門学校制度の接続関係」聖徳学園女子短期大学紀要第19集1993年を参照。
- 26) Ibid., S. 62.
- 27) Ibid., S. 703-704.
- 28) Ibid., S. 698.
- 29) Ibid., S. 701-702.ベルトラムは「議題5」についての報告のなかではむしろレアルシューレを高等市民学校に転換することを求めている。(Ibid., S. 37)
- 30) Ibid., S. 700.
- 31) Ibid., S. 800.
- 32) Ibid., S. 799.
- 33) 拙稿「ドイツ中等段階教育制度と一年志願兵資格」聖徳学園女子短期大学紀要第23集1994年参照。
- 34) Müller, D.K (1977). a.a.O., S. 44.
- 35) Wiese, L./B.Irmer, a.a.O., S. 138.
- 36) Ibid., S. 138-140.
- 37) Müller, D.K./B.Zymek, a.a.O., S. 53-55.
- 38) Ibid., S. 48.
- 39) Pohle, R., Wissenschaftliche Beilage zum Jahresbericht der Bertram-Realschule Nr. 1 zu Berlin Ostern 1910. Berlin 1910. S. 45-46.